

むのたけじさん

戦争とジャーナリスト

1945年終戦の日、むのたけじさんは『朝日新聞』の記者を辞めた。それ以後、郷里の横手市で活動を続けるむのさんが「ジャーナリズム」を語る。(編集部)

新聞は官報に対峙してきた

「むのさんが戦争の時代に新聞記者を選ばれたのはなぜでしょうか？」

私が朝日新聞に入社したのは昭和11年(1936年)、大学を卒業してすぐのことです。

満州事変から5年経って経済も行き詰まり、学校を出ても仕事がなかなか見つからない状況でした。そんな中で新聞記者になろうと思ったのは、秋田の学校の先輩であった石坂洋次郎さんに「おまえは文章がうまい」とほめられ、自惚れていたこともあったのかもしれない。その翌年に盧溝橋事件が起き、日本の全面的な中国侵略が始まります。

その頃、僕は秋田支局に勤めていました。戦死者が出ると県版に報告を書きました。兵士の遺族は「靖国の妻」「靖国の母」と称えるのが決まり文句なのですが、実際に遺族の家に行ってみれば、取

り乱してオイオイ泣いて悲しんでいる。それを見て、新聞に書かれている軍国美談と民衆の現実とは違うのだとはつきりわかりました。

「むのさんのジャーナリズムは、そういう経験から生まれたものですか。」

そうです。ジャーナリズムについて考えたのは新聞記者になってからで、けっして理屈で考えたものではありません。

ジャーナリズムって何でしょう？

「ジャーナル」を辞典で引いてみると、まず「日記」と書いています。要するに一日一日、その日にあったことを忘れないように記録しておくのが「ジャーナル」なんです。それを系統的に体系立ててやればイズムがついて、ジャーナリズムとなるわけです。

出来事の記録をどうして継続するのでしょうか。出来事の記録をずっと続けると歴史の記録になる。歴史の記録を大切にするのは、良いことはまた起こるよ

うに、悪いことは再び起こらないように「鉄箒」という投書欄に1日1通載せるだけでですから、出す人は載らないだろうと知りつつ書いていたのです。

私は「鉄箒」欄に載らない投書から選んで、夕刊に掲載したりしました。あるとき小学生6年生の投書を掲載しました。親父が行列に並べないから、自分がタバコの配給に並んだそうです。それで学校に遅刻した。教師が「なぜ遅刻した？」とポケットに手を入れたらタバコの粉が出た。「おまえタバコを吸うのか」と怒られて、「お父さんのために行列してタバコを買った」と弁解しなくてはならなかった。最後に先生はわかってくれたけれども辛い思いをした。子どもが行列しなければ父さんのタバコを買えないような仕組みは直してください、そういう投書です。

「戦時中の庶民の暮らしが伝わりますね。私は喜んで掲載した。こういう声を出さなきゃ投書の意味がない。そうしたら陸軍省が怒った。「日本はタバコまで困っている」と連合国に知れる。日本を攻撃する材料に使われる」と言うんだよ。「じゃあどうすればいいですか」と言ったら、「捨てる」と言う。それで、配った分は回収しませんでした。新しい別の記事を入れて作り変えました。相当の損失ですよ。けれども、誰も私を怒りませんでした。「そのくらい元気がなくちゃいかん」というくらいで、記者に責任をとらせるようなことはありませんでした。そういう記事を書けるのが新聞として当然だと幹部も考えていたんじゃないで



【戦後60年記念特集】戦争の世紀を越えてI

メディアと戦争

するためです。したがって、ジャーナリズムの仕事は、社会が良くなるように、民衆が不幸にならないように、理屈に合わない苦しみを取り除くことです。そういう強烈な情熱がなければ、この仕事をやっちゃダメです。

あなた方は「メディア」というでしょう。ジャーナリズムとは言わなくなった。敗戦後間もない頃はマスコミュニケーション、ジョン・マス(大衆)の伝達と言った。それが今では「メディア」、伝達の道具です。しかし、新聞・出版・放送・映画は本来ジャーナリズムの仕事です。それをやる以上は、本質をしっかりとりわきまえなければいけない。

世の中には支配するものと支配されるものがある。それでは、マスコミはどっちの側なのか。両方にまたがるのか。その点に近代ジャーナリズムの伝統があるわけです。日本の新聞は明治10年代に一斉につくられます。明治元年から10年に何があったか。日本の教科書では削られてきましたが、それは反政府暴動です。明治8、9年頃まで農民たちによっておこなわれました。飯を食えない貧乏な百姓ではなく、庄屋さん、要するに地主です。明治政府の重税に抗して彼らが一斉に立ち上がりました。それと失業した不平等武士が反乱を起こした。明治政府は、この両者を切り離して徹底的に弾圧しました。

この人民のエネルギーが明治10年代に吹き出してくるのです。国会を開設しなきゃダメだ、デモクラシーでなくちゃ

いかんというように。そのなかで日本の新聞は創刊された。こうして、新聞は政府の出す官報に対峙する存在として誕生してきた。

戦時中でも庶民の側に

「民衆の側に立つ」という伝統があったといえるのですか。」



民衆からの新聞への信頼は敗戦まで続いていました。

東京が3月10日に爆撃を受け、一夜にして10万の人間が亡くなり、焼け野原になりました。大本営はそんなひどいものだとはいえない。実態の何十分の一くらいに言うわけです。発表されると、『朝日』『毎日』『読売』はそれを載せなきゃいかん。私も3月10日の現場に行っただけで

も、見たままは書けない。大本営発表の枠の中で、少しでも真実をにじませるのが精一杯です。だから出てくる記事は事実と合わない。実際に爆撃を受けた人はみんな知っているんです。だから、本来なら記者は「記事は嘘じゃないか」と民衆に罵倒されるはずでしょう。しかしそんなことを言われた記者はいない。なぜか。民衆が新聞の側を理解していたわけ

です。「おまえさん方も検閲されて書きたいことを書けないだろう、我々と同じように酷い目にあってるんだ」と。敗戦まではそうだった。その意味で新聞は甘やかされてきました。

私は1938年に東京に転勤となりました。投書を読む作業することになりました。とても多かったですね。1カ月に2000通から2500通が届く。